



撮影：森善之

1969年奈良県吉野生まれ。闘う詩人・詩業家。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ。17歳のときにNHK「YOU」「土曜倶楽部」出演。1995年より、シタゴコロプロジェクト主宰。2000年より、トイレ連込み朗読プロジェクト実施。2002年、上田假奈代事務所APMを立ちあげる。2003年新世界フェスティバルゲートのコッルームをたちあげ、2004年NPO法人こえとことばとことばの部屋設立。「表現と自立と仕事と社会」をテーマに、ホームレス表現活動支援や就労支援などに取り組み、表現を通して「自律と創造力」を活性化させる社会をめざす。

しなやかなアートは 微笑みを携えて —— 社会と関わりあうアートNPO ——

「闘う詩人」「詩業家」という戦場的なことばとは裏腹に、着物と関西弁で人々をあたたく迎える上田假奈代さん。ライブハウス、ワークショップ会場、就労支援カフェと日々七変化しながら、ニートやホームレスなどの社会問題にも向き合うアートNPO「コッルーム」の創設者。ご自身のライフヒストリーと今後についてお聞きしました。

詩を仕事化すること

—— よりそう言葉 小さな光をもつこと ——

私の母も詩を書いていて、私が発語するようになると、それをわざわざ録音、または書きとめてくれたりしていました。こうして3歳の時、私の詩人デビューは始まりました。

10代の頃は思春期特有の自己中心的なものの考え方に支配されていて、複雑な気分で生きていましたね。

高校生のときに「朗読」を発見して、22歳から自分で企画マネジメントをして朗読活動を続けてきました。そして大学を卒業後、コピーライターや地元吉野での調理師などの仕事をしながら活動を並行し、5年前大阪に来ました。

大阪で暮らしはじめた時、ある若者から「僕、詩を仕事にしたいんです」と相談されたんです。詩の活動では先輩の私ですが、うまく答えられない。手弁当あたりまえの状況でどうやってギャラを得ていくのか。「谷川俊太郎しかいないよ」。後は黙りこむばかり。その2週間後にその青年が自殺してしまった。その後、詩の仕事ってなんだろうと真剣に考えました。誰かがしんどい、辛い、死にたいと思う時に「よりそう言葉」が一編の詩の一行にあったり、真っ暗にみえる人生の瞬間に「小さな光になること」が詩の仕事じゃないかしらと考えました。小さな光をもつことが大切なのよ、ってみんなに伝えていくことが詩人の仕事だとすれば、本当に仕事化することでもっと伝えていくこともできるわけで。仕事にすればするほど、小さな光は伝わるかもしれない。仕事化することで、私の人生の時間を詩の仕事に集中できるんですね。わたしは集中したかったんです。

オーマンズもあるし、美術の展示に使ったりもするんです。仕事について語り合うイベントもあれば、ホームレスの表現活動を応援するイベントも行います。それぞれ文脈が違うから大変さもあるのですが、だからこそ混ざる瞬間もあるんですね、例えばたまたま来てたニートの男の子が、その日のライブでギターを弾いていた男の子を見て心うたれて、その子に勇気をもたらしたと話しかけてたりして。そういう事が交錯している場をつくるためにはスタッフのホスト力が試されますね。ココルームの場でそれぞれ持ち帰るものがあったりすれば嬉しいです。事業を組み立てていく時にも異なる分野の方との協働については意識的に捉えています。

また、このフェスティバルゲートの建物の再生案として「公共利用プラン」が募集されるようです。福祉、医療、環境、教育といった様々な分野の人達とこのフェスティバルゲートとともに働くことができれば、私達はもっと語り合う時間をつくれるのではないかと考えています。

就労支援カフェ・ココルーム

新たな問題として、近年取り組んでいるのが就労支援事業。今本当に辛そうな若者たちが多くですね。ひしひ

公の場をもつこと

——アートを社会化するかたち——

大阪で詩の朗読ワークショップなどをして2年経過した時に、新世界のフェスティバルゲートというビルの一室を運営してみないかと行政から呼びかけられました。3年前のことですが、それまで場を持つなんて考えてもみなかったんです。ここがパブリックなお金が投入されて作られている場であるために、公益性という事もまた考えざるを得ないわけです。まさに詩を仕事化するためには踏まえるための手続きを必要とされたわけです。

「ココルーム」と名づけたスペースを拠点にNPO法人化し活動をすすめてくると、アートを接続点として、異なる分野の人たちと語り合っていくことの必要性をすごく感じるようになってきました。ここはライブだけじゃなくて、演劇もあるしパフ



▼2005年、ダンサーの砂連尾理さんと上田假奈代のコラボレーション「世界のせなかのことば」より@ココルーム

し伝わってくるのは非正規雇用の人たちの辛さです。いつでも代替可能な労働力として消費されている。なかなか将来設計や夢や希望をもちにくい状況になっています。それはアートをやっている人も同様で、「好きなことをやっているからいいでしょ」とすまされることが往々にしてあります。

また一方で、人格障害、発達障害的な人達の問題も見え隠れします。効率優先になりすぎて、人間存在の本質を見失い、ともに生きる職場ではなくなってきたようです。次の世代につないでいく社会作りをおこなう責任が企業にも、わたしたち大人にもあると思うんですね。ココルームではこういった問題のサロン形式のトークイベントや、社会体験の場としてのボランティア等の受け入れを行い、切実な問題に向き合っています。こちらの価値観を押し付けられないように注意していますが、でも「関わる」態度も大事なことと思っています。

ココルームは、今後も社会に関与する「アートNPO」として進めていきたいと考えています。目の前にはいつも無数の扉があるんですけど、時を見計らって扉をどんどん開けていきたいですね。最近では、何でも話しあって笑い合ったり、微笑んだりするのが大事だなと思っています。

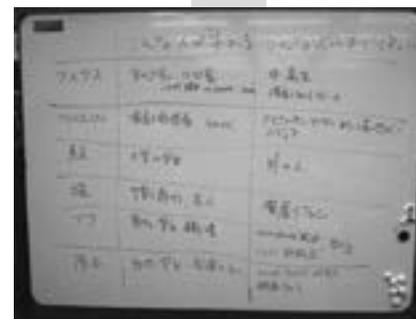
(構成：小林瑠音／インタビュー：築港ARCスタッフ)

1997年に再建され、宗教・宗派を問わない文化創造の場として新しいスタートを切った應典院。その当初から、はじまった演劇の祭典「space X drama」。2003年から若手支援のプロジェクトになり、今年で4年目の実施となった。また、大阪府内の高校演劇の祭典「ハイスクールプレイフェスティバル」（通称、HPF）の開催も4年を数える。6月から8月にかけての三ヶ月は、まさに「演劇の應典院」を印象付ける時間と空間であった。應典院にとって、こうした若き演劇人と協働することにどんな意義があるのか？また、地域の高校とタッグを組むことにより、どのような成果が得られているのか？ミナミと言う地域社会にまで枠を拡げながら、探るのが、今回の特集である。

特集にあたり、まず space X drama2006 の最後に開催された参加劇団全てが参加したアフタートークの様様をお読みいただき、続いて本年度の協働プロデュース劇団「隕石少年トースター」主宰、山内直哉さんにお話と、来年の協働プロデュース劇団に選出された「France_pan」主宰の伊藤拓さんのコメントをまじえ、今年の space X drama がどのようなものであったのかを振り返ってみたい。

そして、吉田美彦 HPF 事務局長と秋田光彦應典院住職の対談から、これまでの HPF の歩みと高校生による演劇創造の場となった應典院の現在を探り、また、ミナミの地域社会における演劇の創造空間としての意義を、日本橋を拠点に活躍する in→dependent theatre プロデューサー 相内唯史さんとの対談で見つめながら、今年の灼熱の3ヶ月を紐解いていくこととする。

（企画：城田 邦生／應典院主務）



■ 特集 「演劇と場」 ■

地域社会における 演劇の創造空間としての應典院

— SPACE X DRAMA 2006・HPFを振り返って

p.6-9……space X drama2006
全劇団総出演トーク・紙上再現
p.10-12……優秀劇団のバトンリレー
p.12-13……space X drama2006 を終えて＜劇評＞
p.14-15……劇場トークサロン
p.16-17……應典院ご近所さんシアター
p.18-23……HPF2006



全劇団総出演トーク・紙上再現

2006.8.27 16:15 ~ 17:00



—— 今回の司会を務めます京都橋大学大学院の清水と申します。今日は、今回の作品の狙いと、なぜそれを演劇という手段で表現されたのかについて伺います。まずは「隕石少年トースター」の山内さんです。いかがですか？

山内：実は中世という設定は初めて挑戦した設定だったのですが、それも私が演劇をはじめたきっかけが、テレビドラマの『古畑任三郎（三谷幸喜「元・東京サンシャインボーイズ」）脚本、田村正和主演の刑事ドラマ』を見てテレビの脚本家に憧れたことにもつながるかもしれません。脚本家や演出家になるため修行のつもりで、演劇に取り組み始めました。

—— ということは、テレビを意識して作品を創られている？

山内：いや、そういうつもりはないです。ただ、テレビのように、パッとスイッチを入れて途中から見たとしても話に入っているようなものを創りたいという思いがあります。

—— 演劇の世界で「テレビ的」というと、「軽い作品」などと悪い意味で言われることもありませんよね？

山内：そうですね、「薄っぺらい」などと言われることもあります（笑）。ただ、学生時代に公演したとき、劇団員が親に「芝居なんか早く辞めなさい！」と言われていたようなのですが、芝居を見た後、そ

た作品を書き続けている単純な理由かもしれません。

—— 東京ガールのメンバーは何人ですか？

上崎：6〜7名ですね。ちょうどメンバーが大学卒業の時期と重なるのもあって、確定的ではありません。

—— 続いては劇団 Kuskus の塩崎さんです。少し厳しい言い方になってしまいかもしませんが、今回のお芝居を見ていただいて、以前に五反田団の前田司郎さんが書いておられた内容を思い出しました。それは「今後、脚本というのは、簡潔書きしたプロットをコンピュータで自動検索して、それらを組み合わせでつくられるようになるのではないか」といった内容です。つまり、率直な感想を言わせていただくと、「どっかで見ただことあるなあ、これ」といった既視感があったということです。これは、演劇だけではないかもしませんが、表現活動においてオリジナリティのあるものを創る難しさを感じたと言えるかも知れません。

塩崎：……指摘、ありがとうございます。

のお母さんは続けるのを許してくれました。というのも、ウチの芝居がいつもテレビで観ているようなものだったので「怪しいものじゃないな」と感じていたのだと思います。こうしたことを考えても、いい意味での敷居の低さは演劇にも大事なかな、と思っています。

—— 次に東京ガールの上崎さんです。今回の作品は再演ですね。内容はいわゆるナンセンスコメディというジャンルのお芝居ですが、こうした内容は観客にとって、合う、合わない、の嗜好がはっきりと分かれるのではないのでしょうか？

上崎：はい、今回の脚本は2年ほど前に大学（大阪芸術大）で初演したのですが、元々私も専門学校でドラマシナリオを書いていたのですが、ある時に脚本を読んでいた機会があって、その時の猛烈な感動が忘れられませんでした。それから卒業して劇団を立ち上げ、たまたま私が座長になって、ここ2〜3年お芝居をやってきました。そして今、やっとお客さんに見てもらおうと自分たちの劇団の「オリジナリティ」って何だろう、というのを悩んでいる最中です。そこで見せたものをどうやって芸術的に昇華させるかが演劇の本質だと思っているのですが、それは結局、自分が生きていることと直結しているじゃないでしょうか？ 今、私は自分を見せること、自分を描くことが「演劇」かな、と考えています。

—— 次は「Fance」par の伊藤さんですが、こちらも大学で初演された作品の改訂だそうですね。

伊藤：はい。そして私も「オリジナリティ」を模索しているところです。また、私も大学ではナンセンスコメディをやっています、ケラリーノ・サンドロヴィッチ

演劇と場

正直なところ、今回の公演にあたって新作が書けなかったため、今いるメンバーでできて、作品としても観客の皆さんに受け入れやすいものを、ということを決めました（苦笑）。

—— ちょうど私が見せていただいた回にアフタートークがありまして、ケラリーノ・サンドロヴィッチ（ナイロン100.C）主宰 劇作・演出家（ ）が好きというお話をされていましたね。ナンセンスコメディの作品を書かれたのはその影響でしょうか？

上崎：……どうでしょうね？ というのも、私がお芝居を始めたきっかけも、実はテレビの三谷幸喜作品でした。とはいえ、私はむしろ出演者に興味を持ったのですが、ここは私が山内さんと少し違うところで、その後、色々なジャンルのお芝居を別の劇団でやらせていただいたりもしましたが、結局、自分がやりたいことが今の形に落ち着いているのではないかと思っています。ですので、たまたま自分が5〜6年前に入った劇団で、ナンセンスコメディをやっていたというのがそうし

さんの作品が好きです。再演にあたって改訂はしたものの、彼の『カラフルメリイでオハヨ』から受けた影響は残っています。再演作を上演することになりましたが、結果としてエンターテイメントに寄ったお芝居にしました。

それはなぜですか？

伊藤：應典院の舞台芸術祭での公演であれば、大阪的なエンタメ系のお芝居に近いほうがいいかなと思っただけです。私の中で、京都といえば鈴江俊郎さん（劇団八時半）、松田正隆さん（マレビトの会）の「静かな演劇」というイメージがあるのですが、同じように大阪といえばエンタメというイメージが強い。ですので、これまでではやってこなかった踊りや歌にも挑戦したものの、「笑えない」という声をいただきました（苦笑）。

伊藤さんはなぜ「演劇」なのですか？

伊藤：元々は映画好きなのですが、やはり「人間が好き」だから演劇をやっています。というのも、「演劇」はやはり長い間稽古して、集客して、ということも含

めて多くの部分で集団作業が生まれます。お客さんとの距離は近く、テレビのようにスイッチを「パツ」と消して出ていくことができない場所にいる。そうした人たちに自分たちは何を伝えられるか：こうしたことを考えて表現する「演劇」が好きです。

なるほど、ありがとうございました。

続いて劇想空飛ぶ猫の萩原さんです。ホームページで拝見したのですが、劇団のポリシーは「みんなにおもしろかったと言われるよりも誰か一人の宝物になりたい」とのことです。そのせいででしょうか、比較的抽象的な作品といえますよね？

萩原：私はテレビが嫌いです。みんなに「おもしろい」といわれることに関心が向くのに窮屈さを感じるためです。それ程深いことを知っているわけではないのですが、テレビや映画など演劇以外の分野の表現活動では、創り手側があほしい、こうしたいという思いをスタッフが全体で創り上げていくことができないように思っています。

最後に應典院主幹の山口さんから

ひと言お願いしたいと思います。

山口：全体を通して「オリジナリティ」という話が何度か出てきたのが印象的でした。今回、全ての劇団のお芝居を観させていただきましたが、私はそれぞれにオリジナリティがあったと断言します。私は、現代というのは固有のオリジナリティが隠蔽される時代ではないかと感じています。情報があまりに多すぎて、どんなに新しいことをやっても、コレはどこそこのアレに似ているとか、何とかの影響を受けているなど、誰かが何かに指摘が出来る環境があります。ではそんな時代のオリジナリティとは何か、というと、料理の「味」だと考えてよいのではないかと思いました。つまり、今回の演劇は皆さんそれぞれに独自の「味」が出ていた、ということをお願いしたいのです。

たとえば隕石少年トースターさんはテレビ的な場面転換をうまく舞台上に持ち込んでいましたし、東京ガールさんは時間を軸を越える演出が「味」になっていまし

今回の「夜光虫」は舞台を2つに区切った面白い形の舞台でしたよね。ご自身の近畿大学は学生演劇が盛んですか、劇団数はどれくらいですか？

萩原：自分たちの学年ではウチだけですね。下の代は3〜4つ、上の代も結構ありましたね。最近話題になっている近畿大学の出身劇団といえば、「テス電所」が挙げられるでしょう。

最後に特攻舞台BANDY団の水本さんです。今回のspace X dramaの後半3劇団は、偶然かどうかわかりませんが、皆さん「死」を描いていらっしゃいました。これは應典院というお寺で演劇をするということと無関係ではないと捉えています。どうですか？

水本：少なくともウチは偶然ですね（笑）。というのも、前々から夏の公演には何かホラーをやりたいね、という話になり、さらにホラーの作品の中でも何が一番怖いかを話し合ったところ、やっぱり死ぬのが怖いということになって、今回の作品につながっていきました。

最後に水本さんが三回の公演でそれぞれオチ（結末）が違うというのは、3つのオリジナリティをつくったと言えるでしょう。また、France_panさんが映像を用いて内容に深みをつけていったこと、空飛ぶ猫さんの2つの舞台がやがて1つに束ねられていく仕掛け、そしてBaku

団さんの本堂ホールの高さを活かした舞台と物語の構成など、挙げていけばきりがありません。

space X dramaという名前に私たちが込めた思いを今一度受け止めて欲しいと思っています。それは、空間（スペース）と出会い（ドラマ）が、よりその「味」に深みやつながりを持たせるのではないかと、ということですね。お寺での演劇祭への参加をとおして見いだしたことで、つながったこと、それらがうまく掛け合わさって相乗効果が生まれれば、との思いを持っています。

——本日皆様さんありがとうございました。

（構成：岡野真大／ケービーズオフィス）

水本さんはなぜ「演劇」なのですか？

水本：「演劇Love」だからです。武藤敬司（全日本プロレスの看板レスラー）の「プロレスLove」と同じです。あとは劇団員がみんな「モテたい」と思っていて、どこかでもですね（笑）。テレビでは男前ではないことが簡単にバレてしまふのですが、演劇なら、舞台上の間はイケてるんちゃうか、と思って演劇をやっている劇団員もいます。つまり欲望に忠実ということですね。

——すごいパワーですからね、体は大丈夫かな、と思う時もありました（笑）。

水本：自分のレッドゾーンを振り切る瞬間を体感したいのじゃないかね。ありったけのエネルギを発散して、叫んで昇天、往生するような芝居を目指しています。人生の2〜3ヶ月という貴重な時間を削って拍手もらおうって事ですから、それくらい「魂」を燃焼させています。理論など小難しいことを言っている人を「俺たちが駆逐してやる！」という心意気で演劇をやっています。



2007

「France_pan」

優秀劇団のバトンリレー

應典院舞台芸術祭 space × drama



2006

「隕石少年トースター」

毎年space × dramaの参加劇団から1劇団選ばれる「優秀劇団」。選出された優秀劇団は、翌年のspace × dramaにて「協働プロデュース公演」と謳って上演をいただきます。2006年度の優秀劇団は、創作性の豊かさを評価し、「France_pan」に決定しました。そこで、2005年度参加劇団の中から選ばれた「隕石少年トースター」の山内さんに、優秀劇団として上演した感想、また今後のspace × dramaや應典院に対する思いを伺いました。

(構成：山口 洋典/應典院主幹・應典院寺町倶楽部事務局長)

【space × dramaに参加して】
旗揚げ1年目の昨年、3作目の公演で優秀劇団として選んでいただきました。「取ろうぜ」と盛り上がったこともありましたが、他の参加劇団を知らなかったのです。結果として優秀劇団として選ばれたのは5作目でした。優秀劇団に選んでいただきながらも、作品を作るにあたっての気持ちの変化は特になく、とにかく良いものを作ろうと思っていた。
space × dramaで印象に残ったのは、優秀劇団には「ホール代が無料」となるということでした。実際、優秀劇団として公演した今回、本来はホール代として充てる部分を新たな挑戦の費用につぎ込むこととしました。ですから、設立間もない劇団が、ホール代を作品の充実に充てていくことができるのであれば、劇団を育てるいい制度だと思えます。
昨年と比較して、今年は演劇祭としての成長が見られたという実感もあります。例えば、ウェブ、ポスター、i Podなど、



制作者会議で出てきたアイデアが実際に形になっていきました。ただ、演劇祭自体の予算がもう少しあると、宣伝活動での劇団からの持ち出しを圧縮することができます。演劇祭の広報が参加劇団の広報面、また資金面での支援になると考えていただき、演劇祭としての予算が充実するといいなと感じています。

【演劇祭の面白さ・演劇の面白さ】

演劇を始めたのは遅い方でした。今28歳ですが、いろんな面で続けていくことの難しさにぶち当たっています。そんななかで続けていられる原動力は、演劇祭にエントリーをして勇気を得たことと、その演劇祭と同じような思いをもってがんばっている仲間と出会えたことです。そして、そこで切磋琢磨して優秀劇団に選考いただいたことも大きいです。ですから、劇場が劇団を、また演劇を大切にしようという企画が行う限り、劇団にはまた演劇には未来が拓かれていると言えるでしょう。

ただ、劇場側から考えるのではなく、演劇そのものから演劇の未来を考えていくと、まだまだ劇団がやるべきことはあります。演劇の世界は独特で、多くの人が接しているテレビや映画の楽しみ方とは全く違った楽しみ方をしています。一言で演劇の世界の独特さを表現するならば、それは「難しさ」と言えるのではないのでしょうか。テレビは何かをしながらでも楽しむことができます。一方で演劇は集中して観ないとダメです。おそらく、観る人が馴れればそれが「面白さ」になるのでしょうか。ですから、そうした表現形態ごとの楽しみ方を前提にしつつ、普段テレビや映画に親しんでいる人たちも演劇を楽しめる作品や劇団があつていいと思つて今後も公演を続けていきたいと思っています。

【劇場寺院・應典院への期待】

一番大きい期待は、space × dramaが続いていつか、應典院の演劇祭への熱意がさらに大きくなっていくことです。この演劇祭には「可能性の交差点」というキャッ



チフレーズがついていますが、ぜひ、演劇の多様性に橋渡しをして欲しいと思つています。演劇にはテレビ的な演劇もあれば、まったく違うものもあります。ぜひ、フリーパスを多くの方の手に渡るように工夫をしていただいて、「こういう演劇もあるのか」とお寺で気づいていただくと面白いと思います。一旦そうして楽しんでいただければ、その後また劇場に足を運ぶきっかけになるでしょう。だからこそ、space × dramaを続けると、さらに新しい切り口が演劇の世界にもたらされると思つています。
また、應典院を使う劇団に対しては、例えば、「満月動物園」のように、場所の特徴をうまく使つて欲しいです。円形を活かして空間を潜水艦やロケットの中に見立ててみたり、隣にお墓があることからいのちのことに触れていくなど、應典院でしか上演できないような芝居が誘致できると思います。独特の空間を活かして、劇団の創作意欲を湧かせていったら、さらに應典院の劇場としての可能性が広がるでしょう。

ほうこうほうこうほうこうまあち / 咆哮彷徨砲口待値

宇宙と演劇を愛する皆さま、こんちには。2006年度 space × drama (以下SD) にて優秀劇団に(何故か)選ばれました France_pan 主宰の伊藤拓です。SD 終了して幾月も経て、受賞理由も明文化されないうまま、SD 特設サイトは無言消滅、いつの間にか私たちは優秀劇団に選ばれました(ようです)。ぶかぶか浮きながら私たち君臨してます、何かその辺に。あははー。これが、大阪の演劇界の(よろしくない)現状です。でも来年度のSDには、どんな(よろしくない)団体が挑むのか、とても楽しみです。飛び込み、潜水、息継ぎ、ぶはー。季節はずれの浮輪をめぐって争う水泳大会。みんな、潜水中。そして過呼吸な僕。とりあえず、待とう。



space × drama 2006 を終えて

西島 宏 (應典院ブレーン)

今回のSDの実行チームは、いよいよ大学祭の実行委員会のような熱気を帯び始めた。應典院の牽引力に息切れがあり、と書くと自虐的すぎるが、劇場としての条件に不足があることは致し方ないことでもある。

その不足を補ってくれたのは、若い参加劇団の皆さんであった。アイデアを持ち寄り、意見交換し、方針を決め実行する。単独の公演よりも、ひよっとすると手間隙がかかったかもしれない。しかし、その過程で新たに生み出されたエネルギーは、それぞれの舞台の中で必ず活かされていたと感じた。社会に向け、自分の言葉で語り始めた彼らの芝居の全容を應典院のスタッフが報告します。

協働プロデュース公演

隕石少年トースター

「王様の犬とその側近と宮廷人」

6/29 7/2

見えないものを魅せる

そう繋がったか…。應典院本堂ホールの高さを活かしたセットで展開された劇の終わりにそう感じた。冒頭、登場人物が朗読形式で私語りをする事で設定に観衆を惹き付け、その後場面を大幅に転換して物語に広がりを持たせ、最後は元の場所に返ってくる展開に対して、終演後に「なぜ設定は中世？」等の問いを産むものの、物語としての広がりや纏まりを感じた。決して観衆の前には現前しない主人公である、王様の犬「イボンヌ」を引き立てる近衛隊長、外交官、音楽家、料理人、道化師、そして王様と側近と「わんぱくオーナー」、各々の協働のあり方を楽しませていただいたと同時に、應典院として協働プロデュースができたか、逡巡する思いに浸った。

應典院主幹 山口 洋典

東京ガール

「もけもけの気持ち」

7/4 5

不条理の深淵

物語は、二人の男女の脳内エンドルフィンで展開する。男の思考と女の思考が不条理にぶつかり合いナンセンスな世界を構築する。劇作家ケラリーノ・サンドロビッチ氏に影響を受けたという作者。であれば、ナンセンスの向こうにある男女の深淵に向けてもう一歩、足を踏み入れてみてみようか。ナンセンス・コメディには、世界を切り取るセンスが必要になってくる。これから、もっとそのセンスを磨いていって貰いたい。

應典院主務 城田 邦生

劇団 kuskus

「ロマンチックアズ☆」

7/18 19

明日を信じてますか？

黒い背景にギザギザの白いラインが幾重にも重なり、ほぼ左右対称に浮かび上がる抽象的な舞台美術はCPUの基盤回路を想像させた。しかし、無機質を感じさせたのはそこまで。「ロマンチックアズ☆」の舞台はなんとハートウォーミングに進行する。物語は現実生きていくための本当の『夢』を求めた3人の主人公が、現実そのものが終わりのない夢であると気づいていくまでの世界を描いている。つまり、明日に向けて進む一歩を信じている人だけが描ける世界が展開されたのである。単純にその世界は羨ましいが、何故信じていくことができるのか。有機的なもう一歩が欲しかった。

應典院ブレーン 西島 宏

France_pan

「咆哮マーチ〜雨と鉛〜」

8/1 2

咆哮の残響

主人公の青年が向き合う妄想と現実、そこに認知症の母や盲目の妹が存在することによって、複数の世界が同時に存在するという不協和音が観衆には響き渡る。しかし、それぞれの世界を精確にひもとくことは観衆には要請されていない。さらには、随所に織り込まれた「笑わせる」ポイントが、さらに物語の解釈を複雑にさせている。とはいえ、出身大学の留学生寮に出演者を求め、撮影したビデオを作品の中に効果的に使ったことにも工夫の跡が観られた。演劇だからその作品世界をどう魅せていくのかの愚直な挑戦は好感を持てるどころであり、今後、應典院という劇場だからこそ立ち上がってくる作品世界に期待をかけよう。

<優秀劇団選考コメント>
space × drama 事務局一同

劇想 空飛ぶ猫

「夜光虫」

8/8 9

平成夢劇場

足湯の湯治場と風俗店の受付。接点を持ち得ない2つの癒しの世界が、ホームレス、黒服の女、受付男の会話からやがて重なりあった。欲望の持ち方が異なる登場人物たちは殺人者、被害者、自殺者となる結末を迎える。自殺者となる幸子のその夢、想いを捧げる対象の描き方にあと少し工夫があればよかったかもしれないが、最後に黒服を脱ぎ捨て、死を望んで肌を露にした姿の美しさに見惚れた。欲望の末、殺人を犯すホームレスとの対比で、夢を追うことすらできない、不器用で純粋な魂のようなものがより際立ったからかもしれない。これらの共存に飛躍や違和感をあまり覚えなかったことに肌寒モノを感じた。

應典院主査 大塚 郁子

特別招致公演

特攻舞台 Baku-団

「机上・キラール・魔人・スイッチ」

8/26 30

バクダンなるエネルギー

いつもながら、エネルギーあふれる舞台に感心した、今回の特攻舞台 Baku-団の芝居でした。しかし、今回の舞台はなにかしらいつもとおもむきが違う?! いつもは、エンタメ系の笑いっぱい舞台が、今回の『机上・キラール・魔人・スイッチ』は、「生と死」というテーマに真っ正面から取り組んだという意欲作。主人公の心の葛藤は、現代社会の暗部を映し出しているようで、なかなか考えさせられるところが随所に垣間見えました。これからも、今までのイメージをいい意味で裏切る挑戦を続けてくれることを期待しています。

應典院事務局長 池野 亮光

劇場トークサロン

ミナミの地域社会における演劇の創造空間としての



日本橋に居を置く in→dependent theatre のプロデューサー、相内唯史さんは、應典院と浅からぬ縁を持つ。in→dependent theatre に関わる前にすでに、應典院の増員スタッフとして関わっていた。その後も、劇団やイベントを通じて應典院を利用したり、サポートを続けて貰っている。元々、in→dependent theatre は、インディーズの映画上映を目的としてオープンしたが、映像だけでなく様々なクリエイターが利用できる場として、改造。現在は、演劇を中心にプロデュースを展開し、関西小劇場シーンの中心となりつつある。演劇創造の現場が、ミナミに勢いが戻りつつあるという相内さん。應典院と in→dependent theatre を中心に、ミナミと言う地域社会における演劇文化の新たな可能性を語り合った。

「それぞれの、場」

相内…ビジネスの側面を忘れてはいけな
いとは思っていますが、プロを目指すア
スリートや育っている部活動です。また
ら本気でやっている部活動です。また
1st に加えて 2nd が出来たことで、余計にサ
ロンのな場所を、という思いも出てきま
した。個別の相談に乗るのが難しくても
集ってもらえる場ができることでこちら
から働きかけることができるようになって
たのはよかったです。よい作品を生み出
すには、作家の個性も大事ですが、個人
個人が活かせることが重要だと思っ
ています。決してハードが十分な劇場では
ないないかもしれないので、こうして人
が活きる環境を重視してます。そこは應
典院も同じでは？

城田…確かに。開かれたお寺なので。ロ
ビーでの打合せや、稽古場などにも使っ
ていただいています。まだまだですよ
(笑)。應典院の最大の力は空間を持つ力
だと思っています。現代建築のアーティ

また2階の窓からお墓が見えることや、
本堂も金の柱があって、ご本尊がいらっ
しやる。これらはアーティスト自体を揺
さぶる場の力です。どの劇場と比べても
かなわないと思えるほど、スピリチュア
ルな力があるのではないのでしょうか。
相内…インディペンデントシアターはそ
の逆かもしれません。いかに作り手が自
由に出来るか、ということを考えていま
す。個性のない空間にどうやって作品を
創り上げていくか、ということに向き合
って欲しいですね。

「それぞれの、演劇祭」

城田…劇場を持つ癖をどう出していくの
かは劇団と同時に劇場の腕の見せ所でも
あります。それぞれに整合はとれていな
い作品群でも見せていく力を発揮する機
会が例えば演劇祭だと思っています。

相内…一人芝居フェスティバルなども演
劇祭と言えるかわかりませんが、同じ舞
台美術のなかで違う作品を作ることで横

「劇場のまちなかにある劇場として」

のつながりが生まれたことは、劇場とし
て劇団を育てていくことになったと思っ
ています。今年は12組が参加しましたが、
それぞれが1位を狙うということは戦友
の中でライバルの関係が成り立っている
ということ。その際、お客さんに受
け入れられる作品を共に創り上げよう
という思いが個々の劇団に生まれます。

城田…一つのコンセプトの中でやりたい
人間がやりたいことをやると、その場
はものすごい個性がぶつかりますから
一方 space drama は若手支援と銘打
っている。最初から劇場が劇団の面
倒を見る仕組みがあります。年末から1
ヶ月に一回くらい集まって制作者会議を
行い、夏の1ヶ月間をどう乗り切ってい
くか、劇団と劇場が協働します。こうし
た場に旗揚げ間もない劇団が集まると、
先輩劇団から制作や宣伝のノウハウを学
ぶことができます。よりプロに近いイン
ディペンデントシアターと、よりアマチ
ュアリズムがある應典院と、それぞれに
祭の空気の違いがあると云えるでしょう。

相内…インディペンデントシアターとし
ての演劇への姿勢は、「都市二事件」
とキャッチコピーをつけたことに原点があ
ると思います。基本的に日本橋はコンテ
ンツビジネスのまちですが、これまでは
ソフトを「買う」まちで「生み出す」ま
ちではありませんでした。なので、何も
ない日常に何か出来事を起こすという意
味で事件を起こす、というキャッチコピ
ーを付けました。ただ、劇場の側から事
件を起こすだけではなかなか事件が起き
ないですから、起こし方の工夫が必要だ
と感じました。ローカルでパーソナルな
部分には他者がなかなか入って行きにく
いわけです。なので、劇場を知り、劇場
に行くという雰囲気やまちなかに浸透さ
せていくにはどうしたらいいかを最近特
に考えています。既に近くの方をご招待
していますが、来年の夏にはまちなかを
にした作品を上演してはどうかと構想中
です。作品を作る過程にまちなかの人たち

関われば、まちと劇場の距離は一気につ
ながっていくのでは、という狙いです。

城田…應典院は「お寺」という特異性を
活かして、お寺がアトスペースとして
機能するという認知度をいかに高めてい
くかが重要だと思っています。今後、寺
町のなかにあるアートセンターのような
ものであること、かつてお寺が劇場であ
ったこと、そうしたことの背景や意味を
伝え、催しに足を運んでいただき、また
お寺を活かす NPO 「應典院寺町倶楽部」
の会員になっていただくなど、多くの
人の参加の度合いを高めねばなりません。

相内…ミナミには自転車で5分圏内に劇
場が集中しています。そして、劇場と劇
場のあいだにはやはりまちがあります。
下北沢が盛り上がりつつあるのも、そこ
に店があり、お客さんが店に寄っているから
です。ミナミが劇場のまちなかになるために、
食べ物屋さんなど多くの人たちがビジ
ネスチャンスを見出してもらって「劇場の
まち」づくりに参加して欲しいですね。

(構成…山口洋典)

◆ ミナミ小劇場 ① ◆

一心寺シアター倶楽

【いっしんじあーくら】

(大阪市天王寺区逢坂 2-6-13)



97年まで7年間「一心寺シアター」として親しまれた劇場を02年6月に再オープン、演者と観客が共に楽しめる劇場を目指す。劇団の成長を手助けし、育成の願いをこめる劇団支援プログラムの「7・5・3企画」の実施や劇場主催の教室事業を展開しており、スティーリングパン教室なども開かれる。一心寺の向かいという立地のためか、演劇とともに落語、浪曲など演芸の公演も多い。

大阪市営地下鉄・御堂筋線・谷町線天王寺駅北へ5分 堺筋線恵美須駅東へ7分
☎ 06-6774-4002 <http://www.isshinji.or.jp/theater/>

◆ ミナミ小劇場 ② ◆

ウイングフィールド

【ういんぐふいーるど】

(大阪市中央区東心斎橋 2-1-27 周防町ウイングス 6F)



ミナミの飲食ビルの6階、『100人の戯空間』をキャッチフレーズとする15年の歴史をもつ演劇のための老舗劇場。劇団間の競争ではなく、個々の劇団・グループの成長の場づくりを意識した「若手劇団応援シリーズ」では、参加劇団間の相互観劇をすすめたり、劇団の実験的公演をサポートするための低料金プラン「のりうち企画」を打ち出すなど、劇団のよき相談役となる劇場を目指している。

大阪市営地下鉄・御堂筋線心斎橋駅東南へ7分
☎ 06-6211-8427 <http://www.wing-f.co.jp>

大阪・ミナミ

應典院で近所さんシアター

大阪市のミナミエリアには50人～200人収容の小劇場が点在しています。いずれも演劇を中心に公演が繰り広げられていますが、劇場ごとのカラーがあります。應典院から自転車で15分圏内、個性豊かな近所さんシアターをご紹介します。

◆ ミナミ小劇場 ③ ◆

in → dependent theatre 1st

【いんていべんと しあてふあーすと】

(大阪市浪速区日本橋 5丁目 12-4 ジャンブル本店 1F)

大阪市営地下鉄・堺筋線 恵美須町駅 左手(南)1分

in → dependent theatre 2nd

【いんていべんと しあてせかんど】

(大阪市浪速区日本橋 4丁目 7-22)

大阪市営地下鉄・堺筋線 恵美須町駅 右手(北)5分

☎ 06-6774-4002

<http://west-power.co.jp/theatre/main.htm>

劇場のメインコピー「都市二事件ヲ」の元、トガった作品や挑戦的な企画を中心に応援、同時に現在の(特に関西の)演劇状況にとって新しい観客の創造にも力をいれている。インディペンデントシアターが推薦する作品につけられる特別なロゴマーク「インディペンデントシアター太鼓判」、一人芝居のプロデュース公演「INDEPENDENT」など演劇界を底上げする意欲的な企画を展開している。



▲in→dependent theatre 1st



▲in→dependent theatre 2nd

今、ミナミの劇場がアツい!心斎橋・なんば・天王寺近辺だけでもざっと10以上の劇場がある。それらが連携を見せ、活発に演劇シーンを盛り上げつつある。例えば、in → dependent theatre が始めたDVDリユースシステムや、ミナミの劇場を主に活動の場とする演劇人が仕掛ける劇場別ウィークリーガイドだ。DVDリユースシステムは、劇場で公演する劇団の紹介VTRを作成し、各劇場で無償レンタル、そして見終わったら、どの劇場に返却しても良いというシステム。今はin → dependent theatreの公演分だけだが、軌道に乗れば、各劇場のオススメ劇団を集約して一枚のDVDに纏め上げるのも夢ではない。また、劇場別ウィークリーガイドは、1週間の各劇場の催しもの一目でわかるという優れたもの。こういった劇場間の連動と比例して、各劇団の動きも活発になっている。さあ!今こそ、劇場に行こう!



「インフェクト」
「ウィークリー・ガイド」
應典院でも貸出・返却
ができる演劇予告編集
時刻表のように集めた
ミナミでの公演情報を



連携と共有が生み出す新たなアートの風景

大阪市港区「築港」に
應典院寺町倶楽部の
新たな拠点が開設!

築港ARC
Chikko Art Resource Center

2006年度より大阪市・財団法人大阪都市協会の「現代芸術創造事業」を受託している應典院寺町倶楽部では、12月12日より大阪市港区築港の「アートリソースセンター by Outenin (愛称:築港 ARC)」を開設。アートに関する多様な情報資源の収集/公開/流通を目的としています。「アートに興味があるけど知りたい情報がみつからない」「アートの現場に関わりたけれど、どこに行ったらいいかわからない」...そういった人々がこの施設を媒介にして、アートの世界に飛び込むきっかけをひとつでも多く手に入れて欲しいという願いを込め、新たな拠点で活動を展開しています。

ここでは、関西でとりわけ刺激的な芸術活動を繰り広げているオルタナティブスペースの紹介ライブラリー「オル棚」の設置や、それらの情報をより生きた情報、として拾いあげるトークサロンの実施、ボランティア情報をはじめとした相談対応など、様々な企画を進めていきます。アートに触れ合う第一歩、そのたったの一步が「重い」一歩だった方々、まずは心を「軽く」して、ゆっくりじっくり、スタッフとお話をしてみませんか!?

築港ARC
チーフディレクター
朝田 巨より



〒552-0021 大阪市港区築港2-8-42 piaNPO308 Tel & Fax : 06-4308-5517 E-mail : arc@outenin.com
開室時間 : 毎週火曜～土曜日の正午～20時 (年末は12/27まで 年始は1/9から)

場魅れ・夢、 高校生の暑い夏

～ハイスクール・プレイ・フェスティバル今年も開催！～

應典院の夏を彩る大阪高校演劇祭、ハイスクール・プレイ・フェスティバル（以下HPF）が開催され、7月22日から7月30日までの9日間、大阪府内9校の演劇部の生徒がその持ちうるエネルギーを開花させました。今年で4年目、年々熱気を帯びてくるHPFについて、HPF実行委員会事務局長の吉田美彦先生と應典院秋田住職が語りました。



Highschool Play Festival 2006
(9days) 7.22-7.30

▼4年の変遷そしてインターケア

吉田：應典院会場での開催は4年ですが、HPFの催し自体は17年になります。それまで使用していた会場が閉鎖することになり、場所を探していたところに應典院事務局長の池野さんからご提供のお話をいただきました。また新しく美しい劇場ですし、我々としては思いがけないお話でたいへんありがたいと思えました。とはいえ最初の1、2年は「何とかしないと」との思いに駆られてばかりで、HPFの方向性について十分考える余裕はありませんでした。3年たつてようやく、自分たちの活動に対して意味を見出せるようになってきたように思います。

秋田：それはどういうことですか。
吉田：應典院を会場にしている学校ではHPに應典院の紹介ページを設けていました。「日本で若者が一番多く集まる寺」という紹介があり、4年間継続し、應典院を

会場にどういう舞台ができるのか、どういふ出会いがあるのかということが書かれてありました。また何を上演するのか、何を願って舞台に立つのかと考えて芝居づくりをしていくようになってきています。単に学内から学外に出るだけではなく、各校の先生方がその場所で公演を続ける意味を考えるようになってきたのです。HPFは非常に重要な役割を果たしてきていると実感しています。

秋田：97年に應典院を立ち上げて以来、なぜ寺で演劇なのかが常に問われ、その意味づけを重ねてきた9年間でした。私にとって「なぜ應典院で演劇なのか」が明確に見えてきたのはHPFがきっかけだったといえます。最初は高校生の演劇祭と聞いて「應典院にふさわしいものなのか」と正直思ったものでした。ところが彼、彼女たちの目の輝き、呼吸、体の伸びを見たときに演劇以前のもっと手前にある「表現をしたい」という思い、「自分らしくありたい」という希求を同時に見たような気がしました。HPFはアマチュアの表現を支える原点だ

と目を開かされました。加えて、ある世代のつながりも見えてきました。HPFではバックヤードを支える20代半ばのボランティアスタッフの存在も大きいですね。そこには、ミドルティーンと20代半ばという若者と一緒にくるには違う階層、ほとんど交流することもなかった異世代の人たちが演劇の技を伝承しているのです。これはすごいことだと思いました。

吉田：ボランティアスタッフに関していただきたいきさつは、財政面の苦しさがかきつけられたのですが、予想した以上の出会いが生まれました。中には大阪府の高校演劇部出身者も、そうでない人たちもいました。普段は伝統を重んじる高校という現場での練習のため、顧問も高校生も閉鎖的になりがちです。とりあえずコンクールで勝ちぬきたいという一念でした。ところがボランティアスタッフの方々が高校生と話すことを楽しみ、一緒に作ってくれることで変化してきました。相手が卒業生だと、教え子になりますから、やはり上下関係で見えてしまうところがあったのですが、柔軟に



大阪信愛女学院高等学校
「Non Stop Life」



大阪市立扇町高等学校
「濃い青≧薄い蒼」



関西創価高等学校
「若者よ、青春を叫べ!」♪&キターマンゾグ編



大阪府立福井高等学校
「猫路 君が居たキャットウォーク」



大阪教育大学附属天王寺高等学校
「Cry For the Moon」



関西大学第一高等学校
「まつぎ」

れが、次第に次の憧れを引き起こして先に
つながるようなものになればいいですよね。
吉田：先生よりスタッフのいうことを聞く
んですよね。いつもと違う気持ちになれる
のかもしれない。学内だけでやっている
のでは、あまり変化はないと思いますし、
学外に出てハコが変わったからというので
はなく、この4年のHPFは外に出ること
によって新しい出会いがあつての変化だと思
います。ほんとうに高校生自身がずいぶ
ん変わってきました。

秋田：演劇に限ったことではありませんが、す
べてのアートには出会う力がありますね。
出会いといえども子どもと先生だけではなく、親
や学校以外の人たちの反応はどうでしたか？
吉田：京都の専門学校で演劇を勉強されている
方がほとんど毎日見に来てくださいました。應
典院をはじめ他の会場へも足を運ばれているん
ですよ。予想外のものを示す高校生の表現力に
関心を持たれていました。またウイングフィ
ールド会場ではお母さんが脚本を書いて娘が主演
というのもありました。お母さんの脚本がとて
もおもしろいですよ(笑)。また親たちの反

対応してくれる若いスタッフに触れて、「こ
ういう若者がいたんだ」という発見が私に
もありました。

秋田：私が一番はじめに阪神大震災での活
動で得たのは「ボランティアする喜びは、
学ぶことだ」ということでした。一方的に
奉仕することや尽くすのではなくて、ボラ
ンティアもまた学びつづけないと続かない
と思うのです。若いスタッフは人間が本来
持つ「支える」ということの原理を、高校
生と出会うことで気付いたのではないでし
ょうか。高校生は表現も未熟で、手を尽
くしてやらないといけない。しかし、その
中核にこめられた表現への思いや情熱に触
れ、実は演劇をするうえで大事なものは、
技術や知識だけではないというメッセージ
を受け取ったのではないのでしょうか。これ
からの社会はケアが大事になると言われて
います。福祉や教育だけでなく、いろんな
関係のなかにあります。インターケアとい
うのか、一方的にケアするのではなく、
お世話という行為を通じてケアする側も魂
のケアがなされているように思います。

応は、学校での練習は毎日帰りが遅く心配だっ
たけど本番では「娘、よくやったな」という感
想がたくさんありました。芝居を家族で楽しみ
みんなで一緒にご機嫌で帰るという風景をよく
見かけました。應典院のロビーでゆっくりくつ
ろいで、気持ちよわかついて、いつもと違う
雰囲気味わって帰って行かれるようでした。

秋田：家族であったことがすばらしい、親を
やっつけてよかったと思う瞬間があつていい
ですよ。カーテンコールの時に、親も力い
っぱい子どもたちに拍手を贈りますよね。そ
ういう祝福って大事だと思います。小さな祝
祭の連続がもつとあつてもいいと思います。

▼自分の存在をかけた表現

秋田：子ども達の表現について変化してき
たことはありますか？
吉田：今までは型にはまっていた、その
子の良さをあまり引き出せていない演出が
あつたように思います。それが今年は出演
者の個性を生かした舞台づくりがなされま

▼憧れの相乗効果

吉田：また、4年目でHPFの卒業生が出て
いて、今年ボランティアに入った若者がいま
す。卒業して間もなくですので、とりあえず
出身校に手伝いに行き、関わりながら20代半
ばの先輩のより高い技術を学んでいます。そ
こで「あの人のようになりたい」と、スタッ
フで職人的に動いている人に対する憧れが
できてくるようです。スタッフにしてもち
やんとやることを聞く高校生がいて、おもし
ろくてやりがいがあるようです。そんなつな
がり4年目のなかで生まれてきています。

秋田：いい話ですね。いま果たしてどれだ
けの大人たちが子どものモデルとなりえる
のか、自分も含めて疑問です。大人が生き
た模範を示すことが困難な社会となってい
るし、一方で「模範とは何か」も、問われ
ています。これからの模範は正解があるとい
うより、自分で発見するものなのかもしれ
ません。交流することができる身近な憧

2006HPF ラインナップ

高校演劇祭は、1990年当時、梅田の「スペースゼロ」主宰者の「高校生に自由に表現してもらえる舞台を提供しよう」という提案から始まりました。その後、実行委員会形式での運営となって4年目、今年は應典院、ウイングフィールド、大阪アニメーション専門学校、精華小劇場という大阪市内の4会場にわたって開催されました。

毎年、HPFはテーマを参加する高校生から募り、チラシやポスターの標語として使用しています。今年は、「場魅れ・夢～君の舞台に恋してる～」。「ばみれ」は舞台の専門用語「場見る」からきた造語で、役者の立ち位置や舞台装置などの位置を決めることです。おそらく、高校生の舞台にかける夢がいろんな位置、角度から客席に向けて広げられたことでしょう。7月22日より8月6日まで大阪府下の高校演劇部が集結し、会期中21作品が上演されました。会場と参加高校は以下の通りです。

.....【ウイングフィールド】.....		
大阪市立工芸高等学校	大阪府立箕面東高等学校	近畿大学附属高等学校
プール学院高等学校	大阪市立鶴見商業高等学校	大阪市立南高等学校
大阪府立住吉高等学校	金光藤蔭高等学校	関西福祉科学大学高等学校
大阪女学院高等学校		
.....【應典院】.....		
関西大学第一高等学校	大阪教育大学附属天王寺高等学校	大阪府立福井高等学校
関西創価高等学校	大阪市立扇町高等学校	大阪信愛女学院高等学校
大阪府立枚方なぎさ高等学校	清風南海高等学校	大谷高等学校
.....【大阪アニメーション専門学校】.....		
大阪教育大学附属池田高等学校		大阪産業大学附属高等学校
.....【精華小劇場】.....		
金蘭会高等学校		追手門学院高等学校



大谷高等学校
「オズの魔法使い？」



清風南海高等学校
「Dawn」



大阪府立枚方なぎさ高等学校
「パレード旅団」

した。ひとりひとりの役者の存在を生かしていく演出です。

秋田：オリジナルでなく、名作といわれる戯曲を演じた学校もありました。

吉田：自分たちの脚本ではないし、難しい設定をどうするのか。ひとまずやりたいことをやってごらんとゆだねた結果、自分の言葉になっていったという印象を受けました。

秋田：若い時代の表現は主体性の目覚めというか、自分はここにいていい、祝福されているという気づきを得られることが重要だと思います。この世代の子どもたちが表現を放つということはとても大事です。今は残念ながら呼びかけが抑圧された社会になっています。なんでもいい。なんでもいいからやってみたら、という社会的キャパシティや寛容性が必要です。そういう場を提供するというのが私たちの姿勢であり、またそれを保証することが大事だと思います。17歳の呼びかけはせりふを越え、自分の存在をかけた呼びかけになっています。生きていくってすごいことだなと思う瞬間です。演劇の一番の原点ではないでしょうか。

吉田：限られたせりふ、たった1回だけの舞

台です。あらゆる緊張感をそこにこめていくわけです。HPFでは一番良い状態で自分たちのよいものを提供しているように思います。

秋田：演出家の竹内敏晴さんは「呼びかけとは世界に対する参加の第一歩だ」ということを本に書かれています。ケイタイもインターネットもいらぬ、ただあなたの身体があればいいんだ、と。その投げかけは、なぜ寺が演劇をするのかというところに選んでいます。劇場というのは、あるのではなくるものだとわかっていきます。つまり使い手たちが劇場を育てていく。應典院はただか10年、HPFも4年です。子どもたちも演劇を核としながらそれぞれの人生を重ねていくんだと思います。劇場を一緒に創り上げていく、場と仲間を次の人たちに引き継いでいきたいと思っています。

吉田：ご厚意で場の提供、多くのスタッフに支えられているので、自分たちの若い力でやっていきたいと思う人たちが育ってほしいと願っています。これからも若い力の成長を見続けていきたいと思っています。

秋田：今日はありがとうございます。

(構成：大塚郁子／應典院主査)

スピリチュアルな共同体の役割

山口悦子（大阪市立大学大学院発達小児医学／大阪市立大学医学部附属病院講師）

1、病院という名の共同体と子どもの死

筆者の病院（以下、当院）は、大阪市内にある病床数約1000床、職員数約1500人の医学部附属病院である。当院では長期療養を要する慢性疾患児が多い。子ども達は長期間もしくは繰り返し入院し、退院しても年余にわたって外来通院を続けるため、その成長発達過程における時間の多くを医療機関で過ごす。このため入院病棟は、子どもや付き添いの家族にとつての生活の場となり、彼らは入院前に生活していた家庭や地域から病棟へ移り住んで、同様に入院している子ども達や付き添いの家族、院内学級の先生、病棟で様々な活動を行うボランティアや芸術

へ至るまでの期間に苦痛緩和を主眼とした治療を行う時期のことを指す。成人患者ではホスピス（緩和ケア病棟）へ転棟・転院することも多いが、小児患者の場合、保護者の多くは、在宅が可能でなければそれまで通りの病棟で継続治療を希望する。また、ターミナル期に入ったことを本人に伝えることを希望する保護者は皆無に近い。

ターミナル期には、患者の子ども本人に周囲から情報が漏れないよう、また、病棟内の他の子ども達にも悟られないよう、細心の注意が払われる。同様の疾患の子ども達が、自分の予後を重ね合わせて動揺しないようという配慮である。そのため、ターミナル期の子ども達の親が心理的負担に耐えきれず他の親に自分の子どもをしゃべってしまふ場合や以前に他の子どもが亡くなった時のことを医療者に根掘り葉掘り聞く場合、他の子ども達が医療者や親たちの前では何も聞かないのに院内学級でターミナル期の子ども達の体調について話題にしている場合などは、医療スタッフの間では、「問題」と見なされる。

子どもの様子が目を追う毎に悪化していく中で、医療者は統一的な「従来のケース通り」の対応にならざるを得ない。この時期、保護者は、いつ頃から個室管理されるのか、個室管理になったらそれまで面会禁止だったきょうだいと会わせることができるのか、などを気に掛けるようになる。このような時期にも医療者は、それまでと同様、本人に感づかせないように、他児に気

家と新しい人間関係を構築していく。病院には、医療を受けている子ども達を中心に、家庭や地域や地元の学校とは異なったもう一つの共同体が形成されているのである。

入院している子ども達の多くは、治療や検査を受けながら医師や看護師と触れあい、教師や友達と学習し、ボランティア学生と遊びながら入院生活の日常を過ごし、アート活動に代表される創造的な非日常を経験し、数ヶ月を経て「軽快退院」していく。しかし、このうち幾人かの子ども達は同様の入院生活を「ターミナル期」として過ごした後彼岸へと旅立つ、つまり死亡退院してゆく。

ターミナル期とは、根治のための治療方法がない、もしくは本人および家族がより以上の治療を拒否した場合に、患者が死付かせないよう、配慮と制限を設けた上で個室への移動やきょうだいと的面会を許可していく。

個室へ移動し、意識が混濁し、心呼吸停止の徴候が現れると、保護者の判断できよう以外にも親戚や知人が部屋を訪れるようになる。一旦、心呼吸停止が起こると、家族が見守る中で医師や看護師によって心マッサージなどの処置が続けられるが、頃合いを見て医療者がベッドサイドから離れ、家族と位置を入れ替わる。その後、主治医から臨終が告げられ、輸液ラインやモニターなどが手早く取り外される。その後、看護師を中心に死後処置が行われ、その間医師は死亡診断書などの書類を整える。日中であれば、他の日常業務も併行して行われている。全ての準備が整って帰宅（死亡退院）する際は、他児の目に触れないように、医療者と家族もしくは葬儀社の社員が亡くなった子どもを移送する。霊安室が使われることは極めて珍しい。医師・看護師が見送る中、子どもと家族は、自家用車または葬儀社の車に乗って帰宅する。

2、日本人の死の文化と共同体

日本は死者供養の為の儀礼が最も発達した国であるといわれている。反面、言語表現によって伝達される観念的な死の文化は未発達である（波平・1990）。波平は、日本人は集団に対する帰属

意識が強いいため、死者儀礼が生きている人間同士の関係性の保持に有利に働くと思われる。また、日本人が生きている人々の人間関係が良好であることに高い価値を置き、その人間関係から排除されることに強い恐怖心を持っていることも指摘している。それは自己の存在を他者との関係性の中に反映させて確かめるといふ日本人の特性の表れでもある。

このような日本人の死者に対する生者の態度、生者同士の態度は、当然のことながら「死につつまる」者と「生きている」者との間の関係性にも通じる。すなわち「死につつまる」者と共同体の構成員間の人間関係を良好に保つことが、共同体内の規範的意識として共有されるのである。田代(2003)は、小児がん病棟のフィールドワークを通じて病棟社会における上記の関係性的特徴を指摘している。田代が調査を行った施設では、当事者である子どもや保護者、医療者達が、病棟社会を秩序立てて関係性を維持するために、死に逝く子ども達に対しても社会的な対処を必要としていた。つまり、ある子どもの死が病棟社会で展開する関係の諸相に『悪い／破壊的な影響』を与えないための、社会的な配慮をとらせた『死に祈り方』というべきものの決定』を行っているとこのように述べている。そのために子どもの死に関する情報は公にはならず、あたかも存在しないものであるかのように扱われる。結果、保護者や医療者は心理的負担や根源的な問いを発する場を失い、子どもはそのことに対する疑義を挟むことを許されない状況

3、スピリチュアル・ケアと共同体

しかし、死を曖昧にすることは、生にも立ち向かえない状況を生み出す危険性を孕んでいる。どれだけ病棟における共同体社会が安定した状態に見えたとしても、保護者や医療者にとつての「何故、この子が死ななければならぬのか」、死を悟っている子ども達にとつての「何故、自分が病気になる、命を絶ちきらなければならないのか」という、自らの存在や生、病、死の意義に対する根源的な問いと苦しみに答える術はない。それは、とりもなおさず共同体の構成員である我々自身の存在や生に対する疑問でもある。

ターミナル期の患者では、このような人間存在そのものへの根源的な(スピリチュアルな)苦しみが大きく、そのような苦しみを軽減するためのケア(スピリチュアル・ケア)が必要とされる。筆者は、先に日本人が自己の存在意義を他者との関係性、つまり共同体の人間関係の中に反映させることよって確立しているという特徴を持つことに言及したが、このことは、患者や家族が抱くスピリチュアルな苦しみも、彼らの個人的な問題としてではなく共同体のそれとして受け止めることで、軽減できる可能性があることを示唆している。

病院・病棟は入院中の子ども達にとつての共同体である。この共同体がターミナル期にある子どもや家族のスピリチュアル・

に置かれ、一方で病棟社会の秩序は保たれるのである。

田代の報告に見られる病棟社会の特徴は、筆者の病院の事例とも共通する。筆者の病院では、ターミナル期にある子どもと保護者・医療者といった共同体の構成員の規範と集団行動の特徴は、「隠蔽」と「儀式化」ということばに置き換えることができる。「隠蔽」とは、子どもの死を公にしないことで、病院の共同体の構成員が一丸となって目指している「元気になって帰る」という目標を損なわないためでもあり、そのことを通じて共同体内の関係性を破壊しない／維持していくという機能そのものである。だからこそ、保護者や子ども達の切羽詰まった「情報収集」は問題行動として取り上げられるのだ。

「儀式化」も共同体の関係を保持する機能の一つである。本来、人が死に逝く過程は個々人に固有な状況であるはずだが、一方で、その状況を病院内・病棟内の共同体で豊かに展開させるには、抛り所のない手探りの作業を要求されてしまう。心理的負担をかかえ根源的問いに責め立てられている保護者や医療者にとつて、これらを解消する手段を持たないまま、そのような作業を行うことはあまりにも苦しい。そこで、病棟全体のルール(死を子ども達に知らせない、など)と一定の統一された集団行動(入院児等への態度、部屋移動のタイミングと理由付け、面会の許可、蘇生から臨終告知までの一連の行為など)がある方が、共同体社会の混乱を避け、安定した関係を維持していく上で有利に働くと考えられるのだ。

ケアに果たす役割は大きいはずだ。しかし、先述したように病棟社会は、死を「隠蔽」する規範と「儀式化」する集合的行動によつて共同体の安定を保持しようとするベクトルに支配されている。なぜ、病棟の共同体がスピリチュアル・ケアを実践するための受容体として作用できないのか。そこには医師のパートナーリズムの残存と真のチーム医療の不成立など、医療者・病院組織側の要因もあるだろう。しかし筆者は、ターミナル期における病院共同体が、主に死に逝く子ども達の当事者のみによつて構成されている点も要因の一つであると考えている。

ターミナル期に子どもと密に接していくのは、保護者(特に母親)・医師・看護師・教師などである。それゆえ保護者も医師も看護師も(時に教師も)当事者であるといえる。当事者としての苦しみを背負いながら、保護者は子どもの精神を支える役割を課され、病棟社会への気配りを怠ることを許されない。医療者も自らと保護者(子ども)から発せられる決して答えのない根源的な苦しみにさらされ続け、一方で平常業務を事故無くなし続けなければならない。このような矛盾が緊迫した状態に置かれて、当事者同士で共同体におけるスピリチュアル・ケアの実践は困難である。しかし、病院・病棟の共同体におけるスピリチュアル・ケアの欠失は、患者や家族のみならず働く医療者の精神をも蝕んでしまう。

スピリチュアル・ケアの対象は、子どもの死に関わる当事者全

てでなくてはならない。迫(2004)は、優れたリーダーが率いる優れた医療チームが形成されている現場では、十分な専門職の配置がない状況で、子どもの死後、悲嘆の共有による癒しが可能であることを示している。これは一種のサファリング・コミュニティ(suffering community)(注一)とも考えられ、このような集団の存在は少なくとも当事者である医療者達のスピリチュアル・ケアに貢献しているといえよう。さらに、宗教者が介在することによるスピリチュアル・ケアの実践も期待される。細谷(2002)は、チャプレンが常駐しているキリスト教系の病院で、自身は無宗教であるといいつつも「私たちの病院におられるチャプレンの佐々木先生と話をしていることも救われる気がするのです。」と述べている。この病院の共同体では、欧米に近い社会的文脈が存在し、死をそれほど隠蔽することなく子どもや家族の意向を医療者が十分に受け止め、双方が納得できる形での個別性の高いターミナルケアが実践されているのである。

4、共同体と宗教、信仰、そして宗教への期待

残念ながら、これまでの日本では宗教は医療と生死の問題に積極的な意味では関われていなかった(波平・1990)。しかし、近年、キリスト教や仏教の宗教者によるスピリチュアル・ケアの実践が、ホスピスなどを中心に広がってきている。超越する年1月に第1回目の会合を持ち、その後1ヶ月に1回程度の割合で学びの場を開催してきている。今はまだセミクローズドの場として広く一般に参加を呼びかけてはいないが、今後規模は拡大していくこと考えられる。

應典院では死生塾活動の到達点の一つに、應典院による在宅ホスピスコordinator拠点の整備があるという。地域に根ざしたスピリチュアル・コミュニティを育む上で、NPOとの連携を果たしてきた應典院寺町倶楽部が持つ多様なネットワークが、新たな共同体を構築する仲介役となるであろう。無論、コモンズフェスタにおいて「療養環境フォーラムin KUMON」の開催に協力をいただいている筆者らもその例外ではないだろう。

【注】

(1) 辛苦の体験を共有し乗り越えて行こうとする人々のグループ。

【引用文献】

- ・ 田代順 2003 小児がん病棟の子どもたち 青弓社
- ・ 細谷亮太 2002 小児病棟の四季 岩波書店
- ・ 迫正廣 2004 小児がん病棟の窓から 新風社
- ・ 波平 恵美子 1990 病と死の文化：現代医療の人類学 朝日選書
- ・ 山口洋典・山口悦子・秋田光彦・日高明 2006 看取りのグループ・ダイナミックス臨床の死生学構築への心理学的一考察 日本心理学会第70回大会論文集 p.174

絶対神の存在を持たず、神と人との関係が曖昧であるような信仰体系を発達させてきた日本では、欧米とは異なる日本独自の文化背景に根ざした展開があるうかと思うが、その際に障壁となるのは、おそらく市民の中に根強く残る死と宗教に対する誤解であろう。

生を見つめるためには、死を曖昧にせず、死と向き合っていかなければならない。そのような意味で、宗教は生を見つめるためにこそ、ある。宗教は、共同体に織り込まれ人間関係の中で醸成される人生や生死、病気の意味の形成にどのように関わることができるのだろうか。殆どの子どもが病院で生まれ、殆どの人が病院で死ぬ日本の現代社会。この生死が病院に隔離されてしまった今だからこそ、病院・病棟といった共同体だけではなく、地域においても死を受け止め生を祝す豊かな共同体を育んでいく必要がある。この点においても、宗教および地域に根ざす宗教者に期待される役割は極めて大きい。このような観点から、これまで多様なアート活動に取り組んできた應典院にこそ、地域におけるこうした新たな共同体、すなわち「スピリチュアル・コミュニティ」を創造する担い手となることを期待したい。

既に應典院では「少生死社会のなか、死の主体は誰なのか、死者を看取るといふことはどういふことなのか、それらの問いに向き合う」(山口ら・2006)「コミュニティとして、「死生塾」といふ活動が行われている。筆者も参加者の一人だ。2006



写真1：小児病棟ナースステーション近辺



写真2：小児科外来待合いで行われたワークショップ風景



写真3：特定非営利活動法人大阪アーツボリアによる院内展覧会。
子どもと芸術家の共同作品を展示。

「ひと」と「場」の交差点……

應典院にしき

呼吸するお寺・應典院の、8月〜10月の活動記録です。関連のエンディング事業なども併せて報告します。

8月

- 1日・sxd劇団Franceパン公演初日、2日まで。夜は毎年恒例、詩の学校のお盆特別編「それから」。お臺で詩作。
- 2日・大阪市住宅局が事務局の「マイルドHOPEN」協議会の助成金ヒアリング。上町台地を「終の棲家とする活動で申請。5日にお盆直前トーク「あしたの供養を考へる」開催。ゲストは手元供養「方丈」店長・尾形由紀さん、葬儀サポートセンター相談員・岩貞光祐さん。秋田住職と池野事務局長も登壇。その後
- 露の団四郎さん、露の団姫さんの「お寺de怪談」恒例の「ピルdeBOON」が続く。
- 8日・sxd劇団劇創空飛ぶ猫公演初日、9日まで。
- 9日・主幹と大塚と美術家・岩淵拓郎さんと「モンスフェスタ」における展覧会「フジミレーティング」。
- 11日・大阪都市協会芸術系NPO支援育成事業とともに受託したNPO法人大阪アーツアポリアにてミーティング。
- 12日・モンスフェスタ2002参加作家・井上廣子さんガイドによる「大地の芸術祭・越後妻

9月

- 2日・関西ネットワークシステム(KNS)の定例会に主幹が参加。
- 4日・大阪都市協会にて大阪市文化事業ネットワーク会議に主幹が参加。14日まで。
- 7日・コミュニティシネマシリーズ「母たちの村」ゲスト岡真理さんと打合せ。
- 11日・sxd審査会。次年度協働プロジェクト公演劇団はFrance | pan に決定。
- 12日・大阪都市協会ワークショップ。
- 14日・京都の住宅会社「ゼロ・コーポレーション」全社員の前で主幹が講演。お寺とまちづくり関係について実践事例を紹介。
- 15日・大阪府教委の会議で主幹が地域活性化とNPOの話題提供。
- 19日・コミュニティシネマシリーズ「母たちの村」プレミア上映。タイアログ実施。ゲストは立命館大学非常勤講師伊田広行さん、京都大学助教岡真理さん。午後には住職と主幹が浄土宗の法然上人80年大遠忌の会議で京都へ。
- 20日・第8回アーツと仕事研究会。

- ゲストは大阪市立大学附属病院の医師山口悦子さん。
- 21日・第22回いのちと出会う会「今を生き抜いて」ゲストは、はあこくふる21主幹の山本苑加さん。主幹は滋賀県職員研修で防災とまちづくりについて講演。
- 22日・文部科学省による同志社大学びのまちづくりセミナーの講師として主幹が出講。29日まで2回連続。夜は第9回アーツと仕事研究会。ゲストはアートNPO「リンク」樋口真幸さん。
- 23日・関西でも文化協会主催「若者と仕事」に主幹がゲスト
- 27日・大阪都市協会ワークショップ会議。夜は主幹が栗東市の講座で出講。
- 31日・岩淵拓郎展覧会搬入。
- 10月
- 1日・モンスフェスタスタート。第45回寺子屋トーク「看取り文化の新しいデザイン」言葉のある風景：應典院〜岩淵拓郎展オープンニング。
- 3日・應典院コミュニティシネマシリーズvol.7「暴力からのトランスフォーメーション」(後巻)
- 4日・インター企画・ブタカブプロジェクト「語るものはスクワレルのか？」若者で「宗教考へる」
- 5日・岩淵拓郎トーク「そこにある言葉、誰かについて言葉」
- 6日・岩淵拓郎トーク「言葉のある風景、もしもは風景である言葉」
- 7日・アトリエナーチエナーチエ「インド、舞踊ワークショップ・またお寺」を向ける」
- 8日・特活「サイエンス・コミュニティ」
- 9日・ライフバランス協会「あなたらしく充実した人生の作り方」。演劇「OMPOWERS」温泉と発声所」公演。11日まで。
- 11日・京都府にゆかりの「きょうの21 P.O.S.A.R.O.N」に主幹が出講。
- 12日・第10回アーツと仕事研究会

- ゲストは淡路フラッツの田中俊英さん。
- 13日・売込隊チーム「ワナワナとワナワナ」演劇が原作となった映画、その両方をいっぺんに観る試み「上映と公演」15日まで。
- 16日・kbz「クレイアニメをつくらう〜新しい「トモダチ」をつくらう3日間」1日目。
- 18日・第11回アーツと仕事研究会。ゲストは葬儀サポートセンターの岩貞光祐さん。
- 19日・第23回いのちと出会う会「金が崎からフイリピンを仰ぎ見る」
- 20日・南タイ舞踊団招聘事業実行委員会「カラダを感じる南タイ舞踊講座」Yukos note プロデュース「新釈・夏の夜の夢」だっ、あなたがすぎなんだも〜ん」公演。22日まで。
- 21日・吹田の「ホスピス塾」による勉強会「在宅ホスピスの実際と課題」に住職と主幹が参加。
- 22日・上町台地からまちを考へる会との協力で「アートなまちの探検隊」を実施。まちの音風景を自転車で採集。
- 23日・kbz「クレイアニメをつくらう〜新しい「トモダチ」をつくらう3日間」2日目。
- 24日・自立生活スティーションYOUNG CAN「高齢者問題を考へる」
- 25日・上田假奈代の「詩の学校」
- 28日・ホスパ！Eospartner・Net大阪アーツアポリア「療養環境フォーラム」INKKATA 療養環境ってなあに？、院内教育について。午前にはからほりまちアートのまち歩きクループ来訪。
- 29日・第46回寺子屋トーク「死者との「コミュニケーションは可能か？」
- 30日・kbz「クレイアニメをつくらう〜新しい「トモダチ」をつくらう3日間」3日目。
- 31日・大阪発：お寺の「実力」〜社会参加仏教と現代。「モンスフェスタ、無事クローシング。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

寺子屋トーク 47

「いのち」のエネルギー

～地球と暮らす新しいライフデザイン～

レストランを経営する大学教員、新しい経済社会システムに着目する映画監督、インド哲学を実践する農家をゲストに、よりよい生き方・働き方を探ります。

○日時 12月8日(金) 18:30～21:00

○場所 應典院本堂ホール

○内容 リレートークとパネルディスカッション

<ゲスト>

今里 滋さん(同志社大学大学院総合政策科学研究科教授)

鎌仲 ひとみさん(映画「六ヶ所村ラブソフィー」監督)

正木 高志さん(森林ボランティアグループ「森の声」主宰)

○料金 1500円(資料代込)

應典院寺町倶楽部会員・学生 1200円

<同志社大学大学院総合政策科学研究科関係者は無料>

今秋、應典院では同志社大学大学院総合政策科学研究科研究科とのあいだで連携・協力に関する協定を締結しました。應典院寺町倶楽部では、この連携・協力の事務局を担い、協定に基づきながら、「よい社会」を創造するソーシャル・イノベーションの協働的実践を今後も追求して参ります。

寺子屋トーク 48

「暮らしの中の終末期を考える」

～微笑みで開く地域の看取り～

日本一高齢化が進む鳥取県にて「なごみの里」という看取りの家を運営する柴田久美子代表を招き、宝塚で開業する今井信行医師と秋田光彦住職が、地域で看取ること、見送ることの意味・意義をひもときます。

○日時 2月18日(日) 13:30～17:00

○場所 應典院本堂ホール

○内容 基調講演とパネルディスカッション

<ゲスト>

柴田 久美子さん(NPO法人なごみの里代表)

今井 信行さん(いまい内科クリニック院長)

秋田 光彦さん(大蓮寺・應典院住職)

○料金 1500円(資料代込)

應典院寺町倶楽部会員・学生 1200円

アートNPOのサポート施設

築港 ARC (アートリソースセンター by outenin)

スタッフオープントーク

應典院が piaNPO (大阪市港区築港) で展開するアート情報の収集・発信・交流拠点「築港 ARC」。今後、その「築港 ARC」に集まるアート情報と、アートの力を用いて多様な社会問題に接近する各種の実践をひもとくトークサロンを定期的実施します。まずは現場のスタッフが事業をご紹介します。今後の可能性を共に展望しませんか？

○日時 12月27日・2月28日(水)

いずれも 18:30～20:00

○場所 築港 ARC (piaNPO・308号室)

○内容 スタッフによる事業説明と

参加者との意見交換

○料金 無料

両日とも同じく、大阪市・現代芸術創造事業に採択されたNPO 法人大阪アーツアボリアによる「なにわーと」のトークもあります (piaNPO・305号室)

應典院主催・應典院寺町倶楽部協力事業
「自分感謝祭」

應典院が贈る1年の締めくくりの場「自分感謝祭」。毎年12月26日に行われるこの催しは、去りゆく年と自分自身を供養する独自の様式での音楽法要です。自分に対する感謝の気持ち、他者に対する懺悔の思いをことばにしたためて、この1年を振り返ってみませんか？

○日時 12月26日(火) (1時間程度の法要)

1回目 14時～2回目 18時～

<いずれも同じ内容です>

○場所 應典院本堂ホール

○内容 秋田 光彦 (大蓮寺・應典院住職) による法要。オルガン演奏は藤田 礼子さん。2回目終了後交流会(参加者は食料品1品ご持参下さい)。

○料金 無料(交流会参加者は1000円)

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX 06-6770-3147

メール info@outenin.com



<次号 51号は……>

2007年2月発行予定

【特集】：アートとNPO

～コンズフェスタ・築港ARCが闘いかけるもの～

いよいよ再建10年を迎える應典院。アートとNPOとの共鳴が地域にどのような価値を生み出しているのか。2年ぶりに再開されたコンズフェスタや、大阪市の現代芸術創造事業を通して應典院寺町倶楽部は何に挑戦してきているのか。お寺とNPOの協働の到達点と課題を明らかにします。

■発行日

2006年11月30日

■発行人

秋田 光彦

■編集人

山口 洋典

■スタッフ

池野 亮光

大塚 郁子

城田 邦生

朝田 亘

■発行所

應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL 06-6771-7641

FAX 06-6770-3147

E-mail info@outenin.com

URL http://www.outenin.com

編集後記

11PFはすっかり應典院の夏の風物詩となりました。癒し系音楽が流れるロビーに張りのある声が響き渡ります。公演前の少々緊張をまじえた「よろしくおねがいしま〜す♥」そして、公演後は破顔一笑「ありがとうございますあ〜」の大合唱……。そんなエネルギー満ち溢れる盛夏を思い出しながら、落ち葉拾いならぬ、やりすごした作業を拾う晩秋です。(大塚)

今回、space × dramaの主担当を初めて経験させて貰い、己の課題ばかりが見えた企画であった。また同時に、お寺はかつて劇場であったという秋田住職の言葉をあらためて実感、再確認する場でもありました。この経験を、来年のspace × dramaに少しでも反映出来るよう、精進を重ねねばならぬと思う今日この頃です。(城田)

築港ARCチーフディレクターの朝田亘です。"大和川レコード"という名前で作家活動もしています。作り手としてアートに関わってゆく過程で、普段当たり前のように行う「表現」や、様々な人との「出会い」が、いかに多くの人に支えられての機会であったかを実感している今日この頃です。自分自身が得てきたアートに触れるステキなきっかけを、素直に他人にも伝えたい。そういった初心を日々忘れず、築港ARCプロジェクトを推進していきます。(朝田)

應典院を訪れた方から「あのポスター、いいね」という話を、この秋に何度かいただきました。伺ってみると浄土宗のポスターとのことで、携帯電話に画像を保存いただいている方もいました。文面は「今やれることは今やる あとでやる、ではなく今やろう」とあります。怒濤のコンズフェスタを勝手に言い訳としつつ、記念すべき50号となるサリュの発行が延び延びになりましたこと、このポスターを見るために申し訳なく思っていたことを吐露させていただくとともに、ここに編集人としてお詫び申し上げます。(山口)

真実にようや 虚言の人にはうち勝て

怒らないことによって怒りにうち勝て。
善いことによって悪いことにうち勝て。
わかち合うことによって物惜しみにうち勝て。
真実によって虚言の人にうち勝て。

「法句経」より

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ

Vol.50

Top Interview

しなやかなアートは
微笑みを携えて

..... 1

特集・演劇と場

地域社会における
演劇の創造空間としての應典院

..... 4

space x drama

全劇団総出演トーク・
紙上再現

..... 6

優秀劇団のバトンリレー

..... 10

space x drama
2006を終えて

..... 12

劇場トークサロン

ミナミの地域社会における
演劇の創造空間としての意義

..... 14

大阪・ミナミ

應典院ご近所さんシアター

..... 16

FRANCIS

場魅れ・夏、高校生の暑い夏。

..... 18

應典院解題

スピリチュアルな共同体の役割

..... 24

「ひと」と「場」の交差点

應典院につき

..... 30